

「谷本、なんだこの雑な資料は。お前のその無駄に爽やかな笑顔をもう少しデスクワークにも生かせないのか？ん？」

書類でデスクをポンポンと嫌味な感じに叩かれ、俺は笑顔のまま心の中で盛大に歯ざしりした。

目の前に座るのは、我が営業部の誇るエースにして、性格の歪み具合も社内トップクラスの小原篤史（おばらあつし）主任だ。

「ありがとうございます！笑顔には自信があります！」

「褒めてないんだよ。媚び売ってばかりいないで結果を出せと言ってるんだ。それともそうやってたらしこんだ連中が、こいつを完璧に仕上げてくれるのか？」

（ウオオオオこの、根暗ネチネチ粘着イヤミ野郎…ッ！）

このいかにも人をいじめるのが趣味ですという顔ときたら、普段取引先に見せる『品行方正なイケメ

ンエリート様』とは全くの別人である。

確かに小原さんは有能だ。仕事も速いし、判断も的確。だから上から評価されているのも納得できる。

ただ、この男は全ての物言いがこの感じなのだ。他者の評価は数字優先、少しでも甘いところがあれば容赦なく突いてくる。皮肉とド正論をオブラート一切なしで投げてくるから同僚や部下からの好感度はドン底だ。

一方、俺。入社二年目の谷本一樹（たにもといつき）は、こいつとは真逆のタイプ。

元剣道部、挨拶は大きな声で、困っている人がいれば即助ける。現場での調整や、営業先との関係づくりは得意分野だ。だがそういう、人間関係で成果が左右される仕事のやり方が小原さんは気に食わないらしい。

まあ俺は散々学生時代の部活動でしごかれたから、皮肉程度では全くめげないし、納得いかなければそれなりに言い返すけど。そのせいで余計に目の敵にされている気がする。

「いいか。今までのように運よくお優しい相手にだけ当たってりゃいいかもしれんがな、お前のその誰にでもいい顔をする性格はビジネスにおいては隙でしかないことを忘れるな。わかったらさっさと一度作り直せ。仕上げなかったら明日の出張は置いて行くからな」

「分かりました。失礼します！」

背中に刺さる冷ややかな視線を浴びながら俺は逃げるように自席へ戻った。

(くっそー絶対嫌われてるよな、俺。やっぱりアルファだと思われてるんだろうな)

小原さんはアルファだ。本人も安全のためにと公言しているし、事務のオメガの子がああクソな性格を全く気にせず熱い視線を向けているので間違いはない。

そして俺は、隠れオメガだ。

このアルファだとかオメガだとかいう第二性別は昔からあるものなんだが、絶対数が少ないせいで法

整備や社会の理解が進んだのはつい最近だ。

昔は、基本的に隠すべきものという扱いだった。今は逆で、公言したり申請を出した方がメリットが多い。

一方俺の様な隠れオメガも少数だが存在する。俺の場合は、そもそも一度も発情期が来たことがない。オメガ特有のホルモンも少なく、普通に筋肉がつくし、身体能力は一般ベータ男性より高いくらいだ。

だから、オメガであることは隠して生きることを選択した。今はプライバシーの配慮とかでそういう選択もできる。

そして剣道部に所属してた学生時代、周囲にはアルファが大勢いたがバレたことも問題になったことも一度もなく、当時も今も周囲からはむしろアルファ疑惑の目で見られている。

きっと小原さんもそう思っているんだろう。アルファには本能的な縄張り意識があるから、どうしても周囲にいるアルファを警戒する傾向があるというし。

(おかげで出張が地獄すぎる)

会社に第二性別を報告すると、パートナーのいないオメガはアルファと距離が近づきすぎないように配慮されたりする。

つまり明日に控える、俺と小原さんが二人で行く一泊二日の出張のようなこともなかったはずだ。

そして翌日。

地方都市での大型プレゼンを終えた俺たちは、予想外の事態に直面していた。

「は？」

チェックインカウンターでフロントの人に言われたとき、思わず間抜けな声が出た。

「申し訳ございません、本日満室でして…ご予約は確かに頂いているのですが、手違いでお部屋が一室しか確保できておらず…近隣のホテルも、本日は大きな学会があるようで全て満室でございました」

「えーと、ツインです…よね？」

「いえ、ダブルで……」

待ってくれ。ツインですらない。この性格最悪ドブ上司と、同室どころか、同じベッド！？

嫌すぎる。ストレスで死んでしまう。

小原さんはしばらくそちらのミスなんだからどうにかできないのか云々と詰めていたが、どうも逆さに振っても別の部屋は出て来ないらしいとわかるとさっさと切り替えた。

「仕方がない。シングルじゃないだけマシだ」

「はあ…」

結局、俺たちは肩を並べてエレベーターに乗った。密室に満ちる無言の重い空気。隣からは、いつも通りの高そうな香水の香りが漂っている。

この人、背が高いんだよな。俺は170あるが、それ以上だ。もしかして小原さんも何かスポーツ系の部活をやっていて雑魚寝に抵抗がないとか…？

部屋につくまでそんな現実逃避をしてしまった。

「……狭いな」

確かに。ビジネスホテルのダブルに男二人が入る

と圧迫感がすごい。しかも真ん中に鎮座しているのは、どう見てもカップル用の大きなベッドだ。

どうするんだこれ。俺が床で寝ることを期待されているやつか。

「寝相が悪かったら蹴りだすからな」

あ、やっぱり一緒に寝るらしい。そうかあ…。

部活の合宿なんてもっと距離が近かったんだから、こいつが相手じゃなきゃ俺だって気にしないんだけど。

「先にシャワー使え。その暑苦しい汗をさっさと流してこい」

こんなときでも相変わらず嫌味かよ。

…でも、今日のプレゼン、小原さんの資料は完璧だったな。俺の拙い説明をフォローするタイミングも絶妙だった。

この人は努力を他人に見せない。俺が取引先と飲み歩いている間に、一人で深夜までオフィスにいるのも知っている。

そういうところは素直にすごいと思う。性格は最

悪だけど。本当～～に、最悪だけど…。

シャワーを浴びて、備え付けの部屋着に着替えて戻ると、小原さんがデスクでパソコンを開いていた。

「まだ仕事ですか？」

「当たり前だ。お前のように、全部投げっぱなしにできるほど暇じゃないんでな」

「アッハイそうですか。じゃあ、お先に失礼します…」

ベッドに潜り込む。家のベッドより遥かに広いけど、ここにもう一人寝ると思うと決して十分ではない。

しばらくして、シャワーを浴びる音の後、パチンと電気が消えた。

ギシ、と隣に重み加わる。…近い。あの高そうな香水の匂い、染みついているのかシャワーの後でも薄っすら漂ってくる。

「…谷本」

「エッ！？ハイ！」

暗闇の中で、小原さんの声がした。

「……今日のプレゼン、相手の専務がお前を相当気に入っていたな。その誰彼構わない人たらしの才能だけは、認めてやらんこともない」

「あ、ありがとうございます？」

「だが孫の話をも三十分も聞くのは非効率だ」

「あは……。いや、まあ、本当に可愛かったんでつい、ですね」

「理解しがたい。他人の家のガキの何が可愛いんだ、どれも同じようなもんだろうが」

「ええ…よく似てらっしゃるとか利発そうだとかペラペラ言ってたのは何だったんです…？」

「適当に気持ち良くさせとけばいいんだよそこは」

一応褒められた…ようだが、言うことがクソ過ぎる。あと、なんか、喋ると香りが強まっていく気がする。

なんだこれ？

「はは、でも主任、いつもそうやって適当言って、相手馬鹿にしてるのバレてますよ結構」

「……へえ。なんだ、一丁前に説教か？」

苛立ったようなザラついた低い声に、香りがまた強まる。なんだこれ。頭がふわふわして、言わなくて良いことを言ってる気がする。

あと悪寒がして、なんか肌がざわざわする。出先で風邪を貰ったかもしれない。

「なのに、自分が頑張ったり、しんどかったり、そういうのを隠すのは上手くて……」

「谷本？」

「……す、すいません、ちょっと、熱があるような気がするんで、離れて寝ますね……」

「はぁ~~~~？自己管理ゴミか？遠足で熱出す小学生か？うつしたらぶっとばすぞ」

労われとまでは言わないけど、本当に性格最悪だなこの人…！

言い返したい気持ちを堪えながら、シーツのなかでギリギリまで端っこにずれて距離をとる。そんな少しの動きにも過敏になった肌が反応して、熱を持った息が漏れた。

「……おい谷本。どういうことだ？お前……まさかオメガなのか？」

背後から聞こえたその声にゾッと血の気が引いた。小原さんが、ばさりとシーツを剥いで身を起こす。

後ろから肩を掴まれて、抗おうとするが全身から力が抜けてしまっていて、敵わなかった。無理矢理そちらを向かされて、暗がりの中で見下ろされる。

まさか、このインフルエンザの初期症状みたいなのが、ヒートだっていうのか？

産まれてから二十数年間、一度も来なかったし、前の健診でも特に変化はなかったはず。なのになぜ今になって？

アルファと同衾したことが引き金になったのか？でも、医者だって、もし今後オメガとしての性質が発現するとしても、予兆があるはずだって言っていたのに。

「お前、体も性格も全くオメガらしくないし、そもそも今まで一度もヒート休暇なんてとったことないよな？だがこの匂いは、発情期のオメガのものだ、頭の中がおかしくなりそうな甘ったるい匂い…」

「お、おばら、しゅに、ん」

「……その様子じゃ、会社に申請もしていないんだ

ろう。そうじゃなきゃ、フリーのオメガとアルファが二人で出張にはならんはずだしなあ」

上手く、頭が回らない。そうだったらなんだというんだ。わかったならさっさと離れてくれ。間違いがあったらどうする気だ。

だが小原さんは、やけに興味深そうに俺をじろじろ見て、顔を近づけて匂いを…いや、フェロモンを嗅ごうとすらする。信じられない。

「ちょ、近づかないでくださいよ！」

「おいおい谷本、そう警戒するなよ。別にお前なんかとってくいやしないぞ俺は」

「…は、発情期って、そんな意志でどうにかなるもん、ですか。主任だって、うっかりで俺とやりたくはないでしょ」

「ふむ」

目を細めて、俺の体を舐めるように眺め回した。あの、人を追い詰めて楽しむような目つきだ。嫌な感じがする。怖い。

「…まあ、お前は全く好みじゃないが…いかにも爽

やかなスポーツマンですとばかりに笑顔を振りまくせに、妙に俺を舐め腐ってたお前が、実はオメガだったのは相当愉快だぜ。その初めて見るしおらしい顔もな」

「は！？しおらしいとか…何言って…」

「強がるなよ。俺だってアルファの端くれだ、目の前の雌が排卵して孕む準備してるってことくらいちゃんと嗅ぎ分けられる」

「っ……！？！？」

ぐい、と顎を掴まれる。

舌舐めずりをする男の放つ威圧感に、ついさっき始まったばかりの身体的変化がぐっと深く進行するのが分かる。部屋の空気が一気に湿度を増した。

「っく、そ、はぁっ…」

「……………こんな匂いをさせて、よく今までベータの振りができたもんだ。それどころか、どいつもこいつもお前は第二性別を公言しない謙虚なアルファだろうなんて噂していたくらいだぞ。まんまと騙されたな」

「ちが、こんなの…今まで、全然…っヒートだって、はじ、めてで」

「初めてのヒート？その歳で？あーじゃあお前、機能不全なのか。そいつは不運だな、同情する。よりによってアルファと同じ部屋で二人きりのときに初めてのヒートとは…」

小原さんの言葉が止まる。

は、と熱い息を吐いて、ゴクリと唾を飲んだ。

「なあお前、俺が適当なことを言って相手を馬鹿にしてるのはバレてるとか言ったがな。お前がニコニコしながら内心俺をコケにしてたのも、相当分かりやすかったぞ？」

言いながら、ペシペシと頬を軽く張られ、びくりと体を萎縮させた。

この俺が？

部活で怒鳴られても拳で殴られても平気だった俺が、このフェロモンに当てられたアルファに軽く掌で頬を叩かれただけで震えているなんて、信じられない。信じたくない。

「や、やめてください……」

弱々しく訴えるも、無視されて伸し掛かれ、軋むベッドの音に脳が恐慌する。

抵抗もできないまま部屋着を脱がされ、ボクサーパンツの中に手を突っ込まれると、そこはヌルリとしていて、糸を引くほどに濡れているのがわかった。

「ひ、な、なにっ？ 触るな！」

「おいおい、俺にぶたれて興奮したか？ すごいな、見るグッチョグッチョに濡れてるぞお前のおまんこ」

目の前に指を見せつけられる。小原さんの長い指に、ネバついた愛液がたっぷり纏わりついている。匂いもあまりに濃くて、かっと顔が熱くなった。

「お前、そんないかにも男ですって見た目してるくせに、こんなに濡らして雌の匂いさせるんだな。ほら、ちょっと触るだけでどンドン溢れて来る」

くちゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡くちゅっ♡

再び下着の中に手を突っ込まれ、中指と人差し指を揃えて濡れた穴を弄られる。

いままで人に触られたことなんてない場所だ。

本来しっかり閉じているそこは今は自分の別の使い道を思い出しているのか、トロトロと蜜を零しながら綻んでしまっているようだ。それを再度塗りこめながら場所を確かめるようにまさぐられ、指先を埋め込まれてくぱっ…と開かれた。

「やっ、いやです、触るな、さわらないで…っ！」

「……なあ。初めてのヒートってことは処女なんだよな？」

「あ、あたりまえでしょうっ！」

言った瞬間、二本の指をじゅぷぷぷっ♡と突っ込まれた。

「っっあ！！？」

「ほお、ケツにしては緩いかと思ったが、濡れてて突っ込みやすいだけで中はちゃんと締まるじゃないか。流石、オメガってのは処女でもちゃんとココで太いもん啜えられるようにできてるんだな、ほら、最初から指二本こんなスムーズに出し入れできる、ほら」

じゅこっ♡じゅこっ♡じゅこっ♡じゅこっ♡じゅこっ♡  
こっ♡じゅこっ♡

「あっ！やっ！あっ！うあ！やだ！やっ！」

「なんだ、手マン気持ちいいのか？どンドンマン汁わいてくるぞ、もう指三本簡単に入る…ははは、本当にお前のここは男のチンポ入れるための穴なんだなあ」

言葉で責めながら、ぐちゅっ♡！ぐちゅっ♡！と出し入れされる指。俺の、男のものにしか見えない足の間で、激しく動く逞しい腕といやらしい水音に、頭が変になりそうだ。自分がこんなに濡れるなんて信じられない。

じゅこじゅこじゅこじゅこっ♡♡！！

「おっ、おっ、あっ、あっ！」

「こら、足を閉じるな。動かすににくい」

あまりに激しく出し入れされるのが怖くて、思わずきゅっと腕を腿で挟むと、その腕の太さを感じて余計に切なくなってしまう。

小原さんはすかさず膝を掴んで、股を広げさせられた。

じゅこじゅこじゅこっ♡！！

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡

じゅこじゅこじゅこっ♡！！

「んあっ！あっあっあっ！やだ、やめて、だめっ」  
「そんなこと言ってもな、中ヒクついてるぞ。俺の手でイきたいんだろ？」

「いやっ、いやだ、イきたくないっ！」

「じゃあ頑張って我慢しろよ。イッたら合意だからな？」

じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡じゅぷっ♡  
ぷっ♡

「うう～～～っ…！！いやだ、いやっ、いや、いや…」

楽しそうに意地の悪いことを言いながら、しなやかで長い指が前立腺のあたりを押し上げる。その支配的な言い方にムカつくのに、今は被虐の予感でゾ

クゾクと背筋が震えてしまう。

(イきたくないっ、イきたくないっ！こんなやつにっ！合意じゃないのにっ！)

じゅぶんっ♡！！

ぐりゅぐりゅぐりゅぐりゅっ♡♡！！

ガクガクガクっ♡♡♡

「イけ」

「あっく、う、うう~~~~~っっ♡♡♡…！！！」

耳元で、あの低い声で囁かれた瞬間、ぶわりと濃い香り…おそらくアルファのフェロモンが匂い立ち。

それに脳を焼かれて頭が真っ白になる中、強く奥まで指を押し込まれて、ぎゅううう~~~~っ♡♡♡と体の奥が甘く痙攣した。

(な、なんだこれっ！？射精じゃない、なんか、変なの来たっ♡♡！？)

奥深くからくる波のような絶頂で、中がずっと痙攣していて、ギュッ♡ギュッ♡と指を食い締めてい

るのが自分でもわかる。締め付けるとき、その太さや形をはっきり感じるのがたまらなく気持ち悪くて、脳に焼きついてしまう。

(うう、ヤだぁ、小原さんの指、味わいながら、イッて？る…っ♡♡)

「は一、いくとき中めちゃくちゃ動くな…男から精液を搾り取る動きって感じだ。これチンポいれてたらめちゃくちゃ気持ち良く中出しできそうだな？」

「……っっ！」

その言葉にゾッとする。男の性器を、そこに…？

指だってイヤなのに。この男の性器を入れて、いくなんて。きつともっと奥まで、満遍なく埋められて、中に、射精されるなんて。

あまりにも気持ち悪くて恐ろしいのに、想像した瞬間、自分の奥がドブっ♡と濃すぎる蜜を吐くのを自覚した。

「おいおい、今すごい量の本気汁出たぞ。中出しレイプ想像してまんこ濡らしてるのか？はは、飢えたオメガやばいな、さぞかし俺のこいつが欲しくてたまらねえんだな、可哀相に」

ぬぶっ！と指を引き抜くと、小原さんは服を緩め、すでにいきり立った股間のものを取り出してみせた。

「…ヒエッ！？！！」

ブルン！と目の前に飛び出したものに、息が止まる。

血管が浮き出るほど勃起した男根は赤黒く、大きさも太さも規格外だった。それがガチガチにそそり立ち、先端から透明な汁を垂らしている。

その凶悪なモノに、俺の中を犯していた指で愛液を塗り付けている。ゆるくしごく小綺麗な指とのギャップは酷くいやらしい。

ムワツとするような雄臭と共に眼前にそれを突き出された瞬間、俺は目の前に靄がかかり、腹の奥がキュンッと竦むのを感じた。

ぶわ、と、あたりの空気が濃密になったような気がした。

「……参ったな。おい、誘ったのはお前だぞ谷本。オメガであることを申告もしないで、ノコノコと同じベッドに入ってフェロモンまき散らしやがって。これだけの条件がそろったらさすがに会社やアルファ側の過失にはならん。言い逃れはできないからな。お望み通り、こいつを使って、今からお前を孕ませてやる」

からかうような気配が薄れ、真顔になった小原さんは、そう言い放った。

『孕ませる』という言葉に、脳より先に胎が反応して、ドツと体の奥から新たに蜜が溢れるのを感じた。その雄々しい逸物で孕まされる準備を、俺の身体が勝手に始めているのだ。

多分最初のうちは、普段は何を言われてもめげない部下の醜態がめずらしくて、脅したら終わりにしてやろう、くらいだったんだろう。

でもいま、ガチガチに勃起して俺に照準を合わせている小原さんの雄は、もうオメガの膣内に種を注ぐことしか考えてない。

「ふッ、また、匂いが濃くなったな？期待してるの

か？このフェロモンは、お前が俺の種で孕みたがっている証拠だ。そうだろう」

「ち、ちが、ちがいます…っ」

「——お前の雌穴を見せろ谷本。自分の両手で左右に広げて、俺のチンポを入れやすいようにするんだ。そうしたら、こいつを根元まで挿れて、奥を突いて、中にたっぷり子種を注いでやる」

「うあ…っ、そんな、そんなの、しないッ！されたくないっ！やめてください主任っ！」

「黙れ、さっさとしろ！」

「ッうあ♡」

なんでだ。嫌なのに、すごく嫌なのに、体が勝手にアルファの命令を聞いてしまう。

自分でもその行動が信じられないのに、下着をおろして片足を抜いて、仰向けに座り足を開いて、尻を割り開いた。

見なくてもわかる。そこはもう、女性器のように赤く熟れてテラテラと濡れているんだろう。

震えながら、忌々しい男の目の前に、今まで医者以外に見せたことのない部分を広げる。

「くっ、ヤバイな…熟れた処女オメガの、初ヒート  
ってのはこんなにキクのか…っ」

熱い粘膜が空気に晒され、また一際匂いが濃く広がったのを自覚した。

小原さんは恐ろしい目でそこをじっと見つめ、ブルリと背筋を震わせると、もはや言葉で責めもせず、無言でそこに自分のガチガチになった男性器を突き立てた。

「え、え、え、うそっ、挿れ…っ!？」

ぐぶ、ぐちゅぶっ…ちゅぶぶぶぶぶぶう〜〜〜…ッ  
♡!!!!

「は、う、あ"あアあ〜〜〜っ……♡♡♡!!!!」

熟れすぎた果実を潰すようなえげつない音とともに、そこにたぶたぶに溢れかえっていた透明な蜜を押し出しながら根元まで飲み込まれていく。

目の前がチカチカした。

自分でも信じられないほど、甘く濁ったため息のような雌の悲鳴があがった。我慢できない。

ぐちゅぷんッ♡♡♡

「あッ、はア"っ♡、太い、の入って…いやだぁ…♡」

一旦根元までをずっぷり…♡と埋め込んで、そこで軽く奥を押し回すと、挿入の角度を確かめるように腰を揺すり上げる。

「う"っ…はあうっ♡」

「動くぞ」

「ア"あッ♡！？」

……どちゅっっ♡♡♡！！！！

小原さんは、すぐに慣れた動きで太く逞しい腰を打ち付け始めた。

どちゅっ♡！！どちゅっ♡！！どちゅっ♡！！どちゅっ♡！！

下品な音を立てて男の剛直が、さっきまで処女だった穴に差し込まれる。

挿入された太く濃い色の性器は、溢れた蜜でしとどに濡れ光り、先走りと愛液をグッチョリ♡とまとわせながら容赦なく出入りを繰り返した。

その度に愛液がどぶどぶと掻き出され、互いの粘膜と陰毛を濡らしていってしまうが、掻き出されたそばから中は濡れ続けている。

「おッ♡！うあ♡！あアッ♡！！」

ぐちゅぼっ♡！！ぐちゅぼっ♡！！ぐちゅぼっ♡！！ぐちゅぼっ♡！！

「ハッ、すごいな、女だってここまでは濡れないぞ。…中がパンパンに充血して、子宮も降りてきてるな。俺のチンポの先に、はしたない子宮口がじゅうじゅう吸い付いてきて…おい、そんなに孕みたいのか、谷本ッ！」

「嘘だ、嘘っ…♡ああっ、あーっ♡！奥、奥やだ♡♡奥、突くの、やめ、やめてくらさいっ♡」

「へえ、奥が良いのか？ふうん、男はケツを使う時もチンポの裏側あたりがイイらしいが、お前は雌だもんなあ？妊娠待ちの子宮ド突き回されるのがそんなに気持ちいいか！」

どちゅんんんっ♡♡♡!!!

どっちゅ♡!どっちゅ♡!どっちゅ♡!どっちゅ♡!  
♡!どっちゅ♡!どっちゅ♡!どっちゅ♡!

大きく広げさせられた足の上に、太くて逞しい腰が何度も力強く叩き込まれる。

長くてデカすぎる性器は当然その腰の送り出す力で最奥までめり込み、むちゅうっ♡♡と力強く押し込まれてから、づぼっ♡と抜かれ、それを繰り返される。

「お前の中、熱くムッチリと腫れていて、俺のチンポを柔軟に受け入れるくせに、吸い付くように纏わりついてくるっ。愛液が常にドブドブ湧いてきて、笑えるほど歓迎してくれてるぞ?フェロモンも、こうやって!突くごとに!濃くなるなあ?受精したくてたまらないんだろ?」

「やだやだやだ♡嘘だ、嘘だあ♡妊娠やだあ♡」  
「くっ……、良すぎる、はあっ、はあっ!すぐに出そうだ…!」

「うあっ♡!だめっ中は、中はだめえ…ッ♡!」

「おいおい、本気で嫌なら俺ぐらい簡単に押しつけ

られるだろ、イケメンスポーツマンの谷本くん？ そうしないってことは、口では何言ったって、俺に中に出されたがってるってことだ、本気で嫌ならやめさせてみろよ！オラッ！さっさとやめさせないと、このまま中に出すぞ？いいの？出すからな？いいんだな！？」

必死で首を振って中出しを拒むが、興奮した雄の肉体にギュウッと強くのしかかられてしまう。

子種を卵子のいる奥地に確実に届けるための、本能からくる強引な抑え込み。

スーツの上からは想像できないほどしっかりと鍛えられた硬く重い小原さんの腰が、俺を力任せに押し潰した。

必死で肩を押し返すが、腕には力が入らなくてビクともしない。このままでは、中に出されてしまう。

俺に申し掛かったアルファは、捕獲した獲物の動きを完全に封じて支配し、ゆっくりと捕食するようにぐにっ♡ぐにっ♡と腰を回して繋がりを深めていく。

その生殖器がとうとう子宮の入り口に鈴口を押し付けるほど深くまで潜り込んだ。

そのまま、最奥でしごくように小刻みに腰をゆすり、小原さんはおれの耳元に唇を押し付ける。

「フーッ…じゃあ、お待ちかねの、ゴムなし膣内射精、していくぞ…♡今、チンポが一番深くまで埋まってるここから、一発目の濃いのを出していくからなあ。しっかり俺の子種で孕むんだぞ、わかったな…？」

あの気だるげな低音が、いつになく興奮した調子で、少し上擦った吐息交じりに言い放つ。

「ひっ♡！っいや、だ、嫌だ、嫌だ、中やだあ♡！」  
「ダメだ、もう出すからな、お前の中に精子出す、そら、出すぞ…っ♡！！」

ビクッ！ビクッ！

逞しいチンポが膣内で引き絞るように跳ね回り、先端の鈴口をぐばっと開いた。

どぼっ！どぼっ！

びゅるるるるっ…♡

ビュルビュルビュルルル～っっっ♡♡♡！！！！

「ひ、や、あああああっ♡♡♡!?!?!」

べっとりと濃くて重い白濁が、びたびたびたっ！！と勢いよく内壁に叩きつけられた。

アルファのドロッドロの精液を胎の奥深くが受け止めてとりこんでいる。

その事実で絶望し目の前が暗くなるのに、孕みながら子宮は大喜びでビクビクと震え、注がれた特濃ザーメンを飲み干すように中がぎゅっ♡ぎゅっ♡と吸いついてしまう。

「や、孕む、孕んじゃうっ♡あ、赤ちゃん、できちゃってる、ウ…♡♡」

ぶびゅっ♡!!ぶりゅりゅっ♡!!  
びゆるるるるるるるるっ♡!!!

逞しい性器が中でさらにビクビクと暴れ回りながら、膣内全体に子種を満遍なく吐きつけてゆく。

「まだ出る、出るぞっ、全部お前の膣に出すっ…!!」  
「うあ、あ、もお、むりい…♡」

びゅるるっ♡♡！！びゅるるる♡♡！

びゅっ…♡！

その射精はあまりにも長かった。絶対に孕ませるという意思を感じる凄まじい量だ。

アルファの種付けは、普通の男の射精よりも量が多いと聞いたことはあるけれど、それを全て雄膣内に受け止める苦しさに喘ぐ。

「うあ、アっ…♡」

全て出し切るまで小刻みに奥を突いていた小原さんは、長い射精を終えて息をついた。

そのまま中で出したものを奥まで馴染ませるようにゆっくりと体全体を揺する。